

【一葉の魅力④】俵口教授が考案した「指さしシート」 全国の病院や薬局に配布

2026/5/16 公開

医療現場で薬剤師と聴覚障がいのある患者が接する際に役立つよう、第一薬科大学・薬学部の俵口奈穂美教授は「『指さし』でつたえるコミュニケーションシート」を考案。塩野義製薬様を通して、全国の病院や薬局計約13万4000件に配布されました。



俵口教授は九州大学薬学部を卒業後、薬剤師として北九州市立病院に勤務。さらに九州大大学院に進んで博士課程を修了し、本学の教員に。聴覚障がいや咽頭摘出など「コミュニケーションバリア」がある患者への服薬指導が研究分野です。

長年にわたってコミュニケーションバリアの研究を続けてきた俵口教授は、薬剤師ら医療関係者と聴覚障がいがある患者との間に次のような「難しさ」があることを知ったそうです。

- ◎ 聴覚障がい者は外見では分かりにくいいため、医療関係者が呼びかけても気づいてもらいにくいケースがよくあった。
- ◎ 医療関係者は、聴覚障がい者が聞こえづらいことは分かっても、どうコミュニケーションを取ればいいのか分からない事態が生じていた。

こうした現状を受け、俵口教授はこのシートを考案。薬局などの受付や投薬カウンターの前に置いておけば、そんな患者が気づいて利用につながります。

コミュニケーションシートは、薬剤師用と聴覚障がい者用の2種類。薬剤師用からは「筆談をしましょうか?」「(呼び出しの時は) 呼びにいきましょうか?」など6つの質問、聴覚障がい者用には「筆談をしてほしい」「(呼び出しの時は) 呼びにきてほしい」などの応答・要望がそれぞれ記されています。

すでにシートを活用している薬局からは「患者さんからの相談が増えた」「感謝の言葉をいただいた」、患者さんからも「一人で薬局に来る不安がなくなった」「詳しく説明してもらえた」などといった声が寄せられています。

俵口教授は「薬剤師は医師や看護師に言い出せなかったことも質問しやすい『最後に会う医療者』。シートを使うこと自体が『コミュニケーションを取りたい』という医療者の姿勢を示すサインにもなるので、シートは障がいの有無に関係なく、広く使ってもらえれば。患者さんとの信頼関係を築くきっかけになってほしいです」と話していました。